

【俳句部門】

最優秀賞

蛇口を左にひねればきりぎりす

尚綱三年 古田 彩華

【評】初秋の中に居る作者ときりぎりす。両者の存在感が、蛇口を左にひねるという行為によって際立つ。中七までを一気に読み、一呼吸置いて下五を読む。すると、きりぎりすがクローズアップされ、その存在に気付いた瞬間の作者の姿が、迸（ほとばし）る秋の水とともに見える。（西口）

優秀賞

海漂うアマクサクラゲ奴は肉食

球磨工三年 菱刈 蓮央

【評】「海漂う」も「奴は肉食」も、いかにもぞんざいな口ぶり。「アマクサクラゲ」のふてぶてしい姿がよく描かれている。（岩岡）

登校の前髪ぬらす深い霧

球磨工一年 宮本 結衣

【評】時間と闘いながら朝からセットしたのだろう。女子高生にとって、前髪は特別。その努力が水の泡になってしまった残念さ。今を生きている高校生と、秋の霧の存在感と。球磨は霧が深い。（西口）

花火がつくる二秒間の静寂

熊本二年 久野 和香

【評】構造が、俳句という「詩」にしては無機質なところが面白い。しかし、そのことでの確に「花火」の世界をつかみとって、知的。（岩岡）

グラウンド踏まれて草の生えぬ小道

熊本二年 堀川 眞一

【評】この作者が見ている世界は、とても静かだ。句形もまた平明で静か。だが、そこには、日々グラウンドを駆けてきた高校生たちのエネルギーが充ちている。情熱を抑える静謐（せいひつ）。その面白さ。（西口）

蛞蝓や何気なく居る同居人

芦北一年 田副 莓

【評】いのちあるもの同士がふと声をかけあう「存問」（そんなもん）の俳句である。「何気なく居る」に、飾り気のない親しみと、一寸（ちよつと）したユ

ーモアがある。(岩岡)

入選

的めがけ夏の音切る一本の矢
日焼けした肌は青春した証
親友と尽きない会話ラムネ手に
あの頃と同じにおいの金木犀
ブロック塀の隙間にも夏は来ぬ

玉名工一年 西山 瑠輝
球磨工一年 久保田 葵
文徳二年 幡手 叶佳
文徳一年 山下 颯太
熊本二年 久野 和香

努力賞

冬の朝吸い込む息が胸に痛い
人ごみに心が踊る夏祭り
セミの羽化ヴィーナスのごとき誕生
友達と身を寄せ合っておでんかな
春野菜たけのこみつばうどパセリ
勇壮に大蛇火を吐く夏祭り
祖母の声ドアを開ければ栗ご飯

芦北一年 林田 実桜
盲学校一年 福井 聖斗
菊池女子三年 松本 麻里百
北稜三年 松田 苑愛
球磨工三年 中村 優寿
荒尾支援三年 西浦 楓夏
尚綱二年 齋藤 菜乃葉
盲学校一年 川端 愛莉

友達と予定が合わぬ夏の末

盲学校一年 川端 愛莉

【総評】今年は応募数は減ったが、内容で高校生らしくレベルも高く感覚も鋭い、考えさせられる佳句に出会えた。幅の広い選句ができたし、質も高かったと思う。

というのは、最優秀作品の「蛇口」の句や優秀作品の「海漂う」、「蛞蝓や」、「火花が」などは「登校の」のようなオーソドックスな佳句に対して、視点、感覚、詠み方が新しい。「グラウンド」の句も、じっくりとよく見ていて、味がある。その他の入選や努力賞の句では、「的めがけ」の句の「夏」が利いた写生句や、「ブロック塀」の句の小さなものへの眼差(まなざし)、「友達と」の句の仲間意識、「春野菜」の句の大胆さなど、多様で、それぞれ新鮮。

全体として、今回選ばれた句は、どれも自由。それぞれ自分の価値観や方法にしたがって、自分の世界を持っている。俳句の材料はその辺にいっぱい転がっているの、心の思うままにたくさん詠めばいい。とにかくまず、自由に表現する楽しさを体得してほしい。(岩岡中正)

高校生に「現在(いま)」はどう見えているのでしょうか。新聞、テレビ、SNSから次々と零(こぼ)れ落ちる不可解で不愉快なできごと。それらは、目を被(おお)い、耳を塞(ふさ)いでも私たちに纏(まと)わりついてきます。なす術が見つからない、ふがいない自分。現在は、『詩』からはるかに遠い時代なのです。

その中で、腐ることなく、世の中を見つめ、このよくわからないものに挑み、

自分の言葉で表現しようという勇者たちがいました。しかも十七音という最小のことばで。たとえば、入選句の中の一句「ブロック塀の隙間にも夏は来ぬ」からは、鬱屈したこの時代を生きる作者の心の疼（うず）きが眩（つぶや）きのように聞こえてきました。夏の訪れを喜ぶ詩に美しいメロディを付けた懐かしい唱歌「夏は来ぬ」とは対照的な世界です。美しい世界を全身で喜ぶという体験を若い人たちに取り戻すにはどうすればいいのだろうかと考えずにはいられません。そして、その一つの手段として、俳句は意義を持つと思います。夏の課題が終わらない、というのも高校生の現在です。それを他人とは違う自分の表現にこだわって表してみる。俳句の面白さはそこにあります。おそらく、現在を生きる面白さもまた。（西口裕美子）

【短歌部門】

最優秀賞

先輩の最終戦の次の日に譲り受けたるバット重たし

文徳一年 松浦 大樹

【評】夏休みが終わると、部活は次学年に引き継がれる。作者は一年生だが、三年の先輩からバットを譲られた。この学校の野球部は近年強くなり県予選では決勝を争うチームになっている。それもあって、先輩が自分に託した思いもわかり、バットの重みが増したのであろう。文語を使った作品であることにも注目した。（橋元）

優秀賞

黒板にうつすら残る先生の熱意感じるチョークの跡は

熊本マリスト学園二年 合田 考太郎

【評】紙に書く場合と違って板書は案外に難しい。先生ならばお手の物でも、筆圧ならぬ白墨圧はそれぞれだろう。そこに目を止め、先生の心を推し量っているのが好（よ）い。純な心が受け止めた、敬愛の感受がまぶしい。（塚本）

マスクから白い息がふーっと出て君のまつ毛がきらきら光る

城北二年 田上 翔舞

【評】緩和されたとはいえ、マスク生活は依然として続いている。まだ不自由な生活のなか、一瞬の様子を端的に切り取って描写している。意識の動かし方が喻（たと）えれば、初霜を見るような快さに通じる。（塚本）

引退後部活三昧幕を閉じ汗をかかないめずらしい日々

熊本商三年 森田 陽菜

【評】夏を境に部活動の三年生は引退するのだろう。その生活の変化に自ら驚き、「めずらしい日々」と素直に表現したところに直截(ちよくせつ)的な感覚が籠(こも)っている、共感する。この何げない感覚は貴重である(塚本)

夏休みいちばん発した言葉はねアルバイトでのいらっしやいませ

芦北二年 福田 彩来

【評】作者は夏休み中アルバイトをしたらしい。それもお店の売り子を務めたようだ。店では毎日客に向かって「いらっしやいませ」を繰り返す。「発した言葉はね」の二、三句に実感が籠(こも)る。「ね」での強調も成功している。(橋元)

本を買い読めば自分が主人公転生するのはこれで何回目

熊本マリスト学園二年 小田 楓華

【評】本を読むといつの間にか自分が主人公になってしまう。そんな作者の気持ちを「転生」という言葉で表現した発想が素晴らしい。本は人を生まれ変わらせる魔力を持っているのだ。(橋元)

入選

AIに愛が分かるかこの恋の行方が分かってたまるものか、と

濟々鬘三年 喜納 涼香

親戚の顔も知らない墓前で線香の火が消えるまで待つ

文徳二年 池田 航生

憧れたあの日の頃の主人公ふと気がつけば思いは巡る

球磨工一年 恒松 修

台風はいいよな進路が決まってて私の進路は迷走中

盲学校二年 澤田 将基

すぐ落ちる線香花火と私の恋熱く燃えるがすぐ消える

菊池一年 大谷 侑美

努力賞

砂浜に足跡つけて走りまわるそんな思い出わたしの宝

菊池一年 行田 侑加

友と行く屋台が並ぶ夏祭り見上げる空に花火きらめく

玉名工一年 松田 翔太

目が合うとドキドキするのはなぜだろう話すだけでもうれしくなる

小川工一年 柴田 明咲

夜の空揺れるカーテン傍らのコップに写る小さい花火

熊本商三年 永代 杏奈

辛いときいつも側にはお母さん普段は言えない五文字の言葉

熊本マリスト学園二年 前浏 心咲

苛立ちの吹っ飛ばし方「カルピス」と答えたあなたはきつと長生き

濟々鬢二年 小田 朱莉

振り返る過去の自分と今の自分次は追う春自分の未来

熊本マリスト学園二年 湯地 咲綺

夕空と私の想いはアカネ色最後の夏は私を見てよ

熊本商三年 有田 柚友

久しぶり炎昼の中友達と日傘片手に海へと急ぐ

文徳一年 吉永 夕風

冷凍庫食べたいときにアイスあり母の予想にまんまとハマる

盲学校一年 福井 聖斗

【総評】入賞作品には昨年以上に高校生らしい爽やかな作品がそろった。昨年は検定試験中の教室の緊張感を詠んだ作品が最優秀賞になったが、今年は部活に題を取った作品が最優秀賞に輝いた。これまで部活を詠んだ歌のほとんどが、がんばって優勝を目指すとかきついけれど頑張るといふものだったが、今年入賞した作品は、先輩から後輩へのバトンタッチや部活が終わって汗をかかなくなつた日々を不思議に思う歌など、現代の高校生の真の姿を描いたものに変わってきた。この変化の第一は先生方の指導によるものと思われるが、生徒がそれに応えるようになったためでもある。それが高校生らしい歌群となつた。また、今年例年になく男子が上位に入賞したのも良かった。一部、個人で投稿した作品には現今流行している若者による幻想的な作品の影響を受けたと思われる作品もあったが、この大会では高校生らしさを大切にしていきたい。(橋元俊樹)

今の高校生はどんな生活で、何を想(おも)っているだろうか——、大きく時代が変わつた今、そういう思いで作品を拝見したが、時代が変わろうと想いは同じなのだと、得心することができたのがあるがたい。

部活動、異性へのほのかな憧れ、親や先生、先輩への感謝、見果てぬ夢・・・日常の高校生活の中で生まれた感情を掬(すく)い上げ、言葉として心を表現したとき、その言葉の欠片(かけら)はどうなるだろうか。日常は何も想わずとも過ぎて行くが、活字となつた想いは消えずに心のどこかにきつと残るだろう。活字となつた作品は心の記念碑ともいふべきものになつたのだと思う。

若い人よ、将来、大人になったとき、活字となつたあの日のあの時の作品をぜひ思い起こしていただきたい。そのことを切に願う。(塚本諄)

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「地球」

私が電気を消したとき
ある国では 望まぬ争いが起き
ある国では 住む場所が奪われ
ある国では 家族が離れ離れになり
ある国では 食料を求めてさまよい
ある国では 命が軽く扱われ
そして
ある子供は 恐怖を知り
ある子供は 犠牲を知り
ある子供は 憎しみを知り
ある子供は 孤独を知り
ある子供は 諦めを知り
私は頭の中の明日を疑わず
私は昨日と同じように眠りにつく

人吉2年 永田 優

【評】「地球」という題名がいい。眠りにつく前の暗闇の中で、作者は世界の国々での惨状と、その国での子供たちの恐怖や憎しみや諦めに思いを馳せる。最後の二連は、声高な反戦詩以上に自他への問いかけになっている。

▽優秀賞

「ぼくは歌う」

ぼくは歌う
どこかの誰かの ほとぼしるような
熱い人生の歌を
どこかの誰かの 甘くて切ない
恋を描いた歌を
どこかの誰かの 突き刺さるような
悲痛な叫びを
どこかの誰かの 雲間から差す光のような

美しく尊い 人々の賛歌を

空つぼのぼくに どこかの誰かを重ねて

自分で自分を 見失い続けて

できあがった ぼくはだれ？

そんな問いかけに 答えられないまま 今日も

ぼくは歌う

人吉1年 山田 士道

【評】この作品の前半はふつうの出来栄えなのだが、後半が素晴らしい。「空つぼのぼくに どこかの誰かを重ねて」以降の終連は哲学的でありながら美しい詩になり得ている。

「霽月」

月に会いたい鳥がいた

飛んでも飛んでも届かなくって

みんなは鳥をばかだと言った

月に会いたい鳥がいた

満月の夜 近くにみえた

月にはやっぱり届かなかった

月に会いたい鳥がいた

どしや降りの夜 月を探して

つかれた鳥は地面におちた

濡れた翼がかわく頃

水たまりには光があつた

鳥がのぞいた水面には

みなも

きれいな月が浮かんでた

雨が上がった空の下

月に出会えた鳥がいた

濟々巒3年 喜納 涼香

【評】この作品は宮沢賢治の「よだかの星」やメーテルリンクの「青い鳥」等の普遍的なテーマを、鳥が月を目指すという、ファンタジー的表現で詩にできている。

「一夜の出来事」

朝鳴り止まぬ雨の音に目を覚ました僕は

その尋常ではない強さに不安を抱き

急ぎ家族の下へ向かう。

母がリビングにいることを確認し

一安心するが母の言葉で

心の奥底にあった不安が再び襲いかかってきた

「球磨川が氾濫しそうやけん役場に避難するよ」

窓の外に目をやると、家の前の道路が

すでに川のようになっていた。

母に姉や父の事を聞くと、

姉は安全に親戚の家について、

父は昨晩からずっと仕事先である役場に行っているという。

急いで身支度を済ませ車に乗り込む

避難途中川を見ると

茶色く濁り竜の如く

轟音を上げうねりながら

流木を飲み込む様に

少なからず恐怖を抱いた。

避難先である役場に着くと

すでに多くの人が不安げな表情で

一緒に来た家族や友人と話し込んでいた。

その日は不安と心配に満ちた避難所で夜を明かした。

朝ざわざわとした喧騒で目が覚め、

声が聞こえてくるのは外からだった

外へ出るともう雨は上がっていた。

人が集まっている方へ駆け寄って

皆が見ている方へ目をやって

僕は言葉を失った。

そこは自分が住んでいた村とは思えないほど

無惨な光景が広がっていた。

僕はただ轟々と流れる川を眺めることしかできなかった。

球磨中央2年 松舟 空

【評】球磨川氾濫の夜の出来事を、抑制的なタッチで描写している「写生詩」である。それは体験を風化させない行為でありつつ、自身の言葉による乗り越えや蘇生の試みのようにも感じる。

「しろいそら」

見つかるワケないよな
シロく広いそこには、限りのないソラがある
埋まらないし、生まれもないよ
Oをかけても、Oでわっても
見えてるハズないよな
まっシロで、無機質でカラっぽな空白
染まらないし、育だたないよ
Oをたしても、Oでひいても
シロくて広くて限りのないソラを
まっシロで無機質なカラっぽを
埋めてみようよ、生んでみようよ
Oにかけてさ、Oをわってさ
染めてみようよ、育だててみようよ
Oにたしてさ、Oからひいてさ
一人でも独りではないよ
少しずつ空白に想いを垂すと
シロに色が広がって、シロじやなくなるけれど
代わったようであわってないんだよ
快晴のように、曇りのように
夕焼けのように、星夜のように
カラっぽに想いが溢れてまたソラができる
自分のソラと あいつのソラ
自分のシロと あいつのシロ
同じ空白は一つもないから
だからこそ 空白は君の原点なんだよ
なんにでもなれるよ
だって、まっシロでカラっぽだから
空白に当てはめてみよう
方法や選択肢は一つじゃないから
きつとみつかる君だけの空白

鎮西2年 中山 天聖

【評】この詩は饒舌なようで、人間の心の本質に迫る面白さに満ちている。とくに「空白」をポジティブな原点として捉えている若々しさに共感する。

「心」

なぜ 人の心は傷ついてしまうのだろう
それは多分

他人と比べてしまっているからだろう

なぜ 人は他人と比べようとするのだろう
それは多分

自分にできないことをできる人への
うらやましきからくることなのだろう

でもこれが原因で

できない自分を低くみてしまう

そして自分は無価値だと考え

深く傷ついてしまう

人は誰かと比べるのではなく

昔の自分と比べるべきだろう

そしたら

ありのままの自分の力を

引き出せるようになるだろう

その力が出せたとき

自分の心に希望が生まれ

そして次第に

心の傷が癒えていくのではないだろうか

反面 人は人と比べることで

自分を高く見せたいという欲を

生み出すこともあるだろう

人の心は複雑だ

だから 人と比べるのではなく

昔の自分と比べよう

そうすることで

心が傷つくこともなくなり

自分のペースでやりたいことを

頑張れるようになるのだと思う

それが一番よい選択なのだろう

【評】他人ではなく過去の自分と比べる、という思想を、言葉ではなく生き方にしたいとの態度が伝わってくる。「だろう」という終わり方で、自分の正義を押し付けられない態度にも好感が持てる。

▽入選

「またね」

「またね」と言葉を交わすとき

あなたは何を考えているのだろう

命は電池みたいだ

いつか必ずなくなる日がくる

でもいつなくなるのかは誰も知らない

だからどの会話がその人との最後になるのか分からない

後味の悪い別れをして

それが今生の別れになってしまったら

きつと悔やんでも悔やみきれない

一生埋まらない心の穴がずっと痛むだろう

そんなの私は嫌だ

だから私は心がける

どんなに最低な日でも別れ際は笑って手を振る

笑顔で気持ち良く

「またね」と交わす

次会える事は当たり前じゃない

次会えたならそれは「奇跡」だ

だから人はもっと「またね」に心を込めるべきだ

大切な人との別れ際ならなおさら

「またね」と言葉を交わすとき

私は絶対笑顔で手を振る

球磨中央2年

立場 日菜

「あの日」

日に焼けた畳に差す一筋の金色

ただぼんやりとしながら思い出す

まだほの暗い空

眠気を覚まそうと優しく照らす色

あの日当たり前のように迎えた一日だけど
鏡を見ると違うこわばった顔

それでも空気を読まないで明るく輝く太陽
いやだな

そう思ってもカレンダーを見ると今日

緊張が伝播したのかみんな同じ顔

ホールのまん中で自分の音が聞こえない

止まってほしいくらい心の騒音

気づけば帰りのバスの中

安堵と少しの喪失感

窓に差す光はやっぱり明るい

畳に差していた光の筋が途切れて

今この瞬間に引き戻される

光が私をあたたかく包む度に

カメラのフィルムのような思い出と共に

私をもう二度とないあの日に連れていく

人吉1年

佐藤 結

「子供心を忘れるという事」

他人の気持ちなど分かるわけがない。

「相手の気持ちになつて物事を考えよう！」

と、私達に教えたあの大人は、あの時間の私達の

未熟で不完全で不安定な気持ちを

分かっていたというのだろうか。

歳を取るにつれて、昔の気持ちを忘れて

しまうものだ。子供の気持ちを、考えを、

分かってやれぬ大人はきつと、子供の頃を

忘れてしまったのだ。思い出せぬのだ。

大人になる上で、生きてゆく上で、それらを

忘れる事は大事なのだろう。

訳も分からず涙が出る私の気持ちも、

三日後の私は忘れ、他人事だと感じている

そしてまた三日後、思い出す。その時はその時で

明るかった私を忘れる。

都合の良い生き物だ。

大人になった私はこの思いを読んで

起こる感情はきつと「はずかしい」だけだ。
私もきつと、思春期の気持ちも忘れた
大人になってしまふのだろうな。
悲しいな。
さみしいな。
大人になりたくないな。

鎮西2年 高濱 菜々子

「理由」

春が嫌いだ
大切な人たちにさよならを言わなければならないから
夏が嫌いだ
実らない努力があることを知ってしまったから
秋が嫌いだ
冷たい風のせいで人肌が恋しくなってしまうから
冬が嫌いだ
暗くて寒い夜に溺れそうになるから

でも

朝が好きだ 昼が好きだ 夜が好きだ
自然を 生を 人の暖かさを感じる事ができるから
本が 音楽が 友達が 自分が 好きだ
だから
だから、私は今日も生きる。

文徳1年 亀田 来実

「好きになりたい」

自分を好きになりたい

まずは外見から
化粧水をつけて、美容液ぬって、乳液もつけて、
肌はましになってきた
メイクもしよう
動画で勉強して、コスメ集めて、練習もして、
だいぶ変わったかも！
でも、あれ？あの子の方がかわいくない？

じゃあ、内面も

人にやさしくして、何でもポジティブに考えて、
ちゃんとできてるかな？

行動にもうつしていいこう

積極的に動いて、ゴミを拾って

いい感じかも！

でも、やっぱりあの子の方がみんなに好かれてる

あーあ、わかってるよ

あの子はこうやって人と比べたりしないんだ

まだ自分のこと好きにはなれないけど

好きになるために努力してる自分のこと

ちよっとだけほめてもいいかな？

人吉2年

米岡 沙希

▽努力賞

「大切なもの」

私が朝起きる時

あの子は肌寒い外に居て

私のご飯を食べる時

あの子は空腹で泣いている

私が出る時

あの子は家族を探している

私が友達に「おはよう」と言う時

あの子は友達を探している

私があぶしい光に包まれる時

あの子は一人で寂しさと孤独の中にいる

同じ人間なのに

同じ地球に住むのに

どうしてこんなに違うのだろう

何がそうさせたのだろう

本当に必要で

本当に大切なものは何か

今こそ考えなければならぬと

あの子はその目で

訴えている

人吉2年

高山 心陽

「緑の賛歌」

廃屋に芽生えた命
窓辺からのわずかな光と水を頼りに
一本の木が力強く立っている

永い永い時間ときを経て

孤独のなかを生き抜いたその姿に圧倒される

終わりを越えた先の新しい命を感じ取り
その美しさに心奪われる
そして「廃」から「緑」へと命が引き継がれてゆく

芦北1年

長口 美羽

「優しい人」

あの人は優しい
いつも笑顔で明るくて
みんなの話を聞いている
周りをよく見ている
小さな変化にすぐ気付く
本当は下を向きたいのに
大丈夫と言って笑顔をつくる
自分よりも周りを優先して
みんなに頼られている
でも優しいあの人も疲れるし、傷つく
だけど周りに心配をかけないようにそれを隠す
私は優しい人にとつての優しい人になりたい
優しい人によりそえる優しい人になりたい

小川工1年

村上 媛愛

「散り菊」

すうっと息を吸って先端に火をつけ
もっと長くと祈りながら
その一生を目に焼き付ける

『蕾』

『牡丹』
『松葉』

たった数秒数グラムの命に
花の名を授けた人が
どんな気持ちだったのか
僕には分からないけれど

取るに足りない僕らの短い命
どうせなら咲き続けようか

灯の消えるその瞬間まで

濟々覺2年

小田 朱莉

「メルトサイダー」

昼下がりに、電車を待つホームで、自販機のボタンを2度押した。

「財布を忘れた」と嘆く君に、サイダーを奢ったのだ。

嬉しそうにボトルを受け取る笑顔が

乱反射のスポットライトを浴びて眩しかった。

ボトルから覗く君は、少し淡い色をしていた。

プラスチック越しの世界は解像度が低くて、

これならちゃんと話せると思った。

「何してるの」可笑しそうに笑われて

このまま電車なんて来なければいいのに。

差し入れ 夏期講習後に飲んでと渡されたサイダーは

とつくに気が抜けて ただの甘い水へ成り果てた。

タイミングが悪いと怒っても

「午前にも話したかった」なんて言われては

私も気が抜けてしまう。

しゅわしゅわり。

溶けゆくような、でも忘れられない八月。

球磨中央2年

佐伯 真綾

「文字と私」

私は文字が好きだ

文字が集まるとたくさんの意味が生まれてくる

文章になると自分の思いが伝えられる。
文章がもつと集まると、小説になる
小説になれば見たことのないものでも目に浮かび
自分をその世界に引き込んでくる
引き込まれてしまえば周りの音は聞こえない。
ただあるのはその世界だけ
文字は難しい
自分の思いを正直に伝えようとしても上手く
伝わらないことの方が多いから。
争いの原因にもなるし上手くつき合えない。
いつになれば上手につき合えるのだろうか
いつになれば…。

人吉1年 尾方 佳穂

「キャンパス」

「真っ白なキャンパスがありました。
僕はもっている色で
みたものすべてを描きました。
雨が降っても雪が降っても僕は笑顔で描き続けました。

幾月か経って気がつきました。
カラフルになるはずだったキャンパスは
真っ黒なキャンパスに変わっていました。
大きな穴があいていました。
僕は笑顔の作り方も忘れてしまいました。」

「素直で健気な子どもがいました。
その子どもは広い心で
すべての人に優しく、愛情深く、接しました。
どんな出来事があっても受け入れ、笑顔で接し続けました。

幾月か経って気がつきました。
カラフルになるはずの心は
真っ黒に染まっていました。
大きな穴があいていました。
彼は笑顔の創り方も忘れてしまいました。」

家に帰り、今日もこのくたくたになった仮面をはずす。

偽善者？ピエロ？いや、違う。
この世界も君も僕も、虚構だったんだ。
空っぽ空っぽ辛っぽなんだ。

朽ちた漆黒の心臓は
音もなく、叫びもせず、ただ独りで崩れていった。

人吉2年 迫田 さくら

「すき、きらい」

「すき」

きらきらが頭からはなれない
ふわふわが頭を甘く溶かしていく
幸せなきもち

「きらい」

ちくちくと相手を攻撃してしまう
とげとげで自分のこころも痛くなる
辛いきもち

「すき」

じわじわと周りが見えなくなってしまう
ばちばちと嫉妬の視線で見ってしまう
危ないきもち

「きらい」

ちらちらと目で追ってしまうのはきらいだから
ざわざわと不安になるのもきらいだから？
不思議なきもち

「すき」が「きらい」になる

「きらい」も「すき」になる

二つとも大切なきもち

二つともおもしろいきもち

人吉1年 上村 彩寧

「深海」

深海は真っ暗だ

人工的な光はもちろんだ日の光さえとおさない

深海は無音だ

時たま聴こえるボウという音はいつなったのかは

まったく分からない

深海は不思議だ

少し上に上がれば荒波なのに少しの水の流れも感じない

ここは心が落ちつく場所

心の住処

今日も沈むずうとずうと海の底

芦北1年

潤本 麗愛

【総評】高校生の自由詩を読むと、いつも忘れていた大切な何かを思い起こす得難い機会になる。詩は未完成でも、随所に驚きや発見が瑞々しく言語化されているからだ。それは自ずとこの世界の戦禍や自然災害を自分事として受け止める態度につながり、日常を、奇跡や感謝として表現する作品が多かった半面、大人社会への疑問や拒否も鋭く表現されていた。入選作以上は紙一重で選考には苦勞させられた。最優秀作は自分の日常と戦禍や災害に明け暮れる国々と、子ども達を淡々と描いていて、「地球」という題名が作品のスケールを大きくしていた。豪雨の記憶を冷静に形象化した「一夜の出来事」や「あの日の」や「またね」は言葉によって自分の未来を描き直す試みのように感じた。また、自分や他者への切迫した問いかけにもハッとさせられる。例えば「空っぽのぼくに どこかの誰かを重ね」や「空白は君の原点」等という洞察は、存外自我の本質の一部を言い当てている気がした。(内田良介)

【肥後狂句部門】

最優秀賞

今青春 振られた友と河川敷

熊本工2年 白鳥 太智

【評】告白したがダメだったのか、交際していたけれど終わってしまったのか、友人の心は傷ついている。あなたはかけがえない友と二人、黙って河川敷に座り川面を眺めているのでしょうか。大人になっても、この時と情景は二人の心に残っていることでしょう。(下田)

優秀賞

責任重大 最後のチャンス決める俺

熊本工2年 國武 真央

【評】最後に責任のあるチャンスならさぞ緊張することだろう。自分を叱咤(しった)激励し、チャンスに立ち向かう心の中を句にした。「がんばれ俺」の表現が斬新でおもしろい。(鳴神)

責任重大 ゆっくり運ぶ試験管

熊本商3年 田中 和都

【評】実験は予想し、実験・観察し結果を得る。グループですることが多いから、試験管の液体をこぼしてもしたら大変。皆に迷惑をかける。

さあ、集中して始めましょう(下田)

間に合わん 回るチェーンと垂れる汗

熊本工2年 池田 皇雅

【評】何とかして間に合いたいと必死にこぐ自転車。ペダルを全力で踏み込んでいる姿を、回るチェーンと表現したところに作者の光るセンスを感じます。(下田)

責任重大 大人のすごさ知った今

熊本商1年 小佐井 響

【評】成人年齢が引き下げられ、大人への仲間入りが早まった。近づく大人への不安と大人の大変さ、すごさを感じたようだ。大人への自覚が読み取れる頼もしい句となった。(鳴神)

間に合わん 終わらん課題終わる夏

城北3年 柏 龍之介

【評】夏を楽しんだ分、苦しみが待っていたようだ。終わらないものと、終わるものを対比させることで句を成立させ、さらに作者の焦りをうまく表現することができた。(鳴神)

入選

今青春 未来目指して準備中

盲学校2年 澤田 将基

責任重大 巢まで運ぶぞ頑張るぞ

はばたき高等支援1年 横田 真実

間に合わん 警報でたらずぐ避難

球磨工3年 糸原 茉優里

今青春 あの子に心ぬすまれた

球磨中央1年 東 優希

責任重大 ご飯係の夏休み

黒石原支援1年 金澤 慶侑

努力賞

今青春 くやし涙は虹となる

球磨中央1年 野田 茉莉

今青春 ぼくらが描く物語

城北1年 和田 優駿

今青春 みんながみんな主人公

芦北2年 山下 純弥

間に合わん 時計の針がチクタクと

球磨中央1年 平川 俐衣奈

今青春 母よごめんよ反抗期

熊本工2年 藤本 一倅

責任重大 この矢あてれば全国へ

熊本工2年 高野 綺音

今青春 ずっと好きばい照れるやん

球磨中央2年 野中 咲良

責任重大 思わず言ったまかせてよ

熊本商1年 松原 優吏奈

間に合わん 弟のまつ保育園

城北3年 渡邊 萌侃

【総評】昨年よりも多くの応募ありがとうございます。また基本的ルールもずいぶん守られていて嬉（うれ）しく感じています。さて、句を作る上で大事なことは笠の意味を理解し、笠に合うように七・五と付け句をする（続ける）ことです。笠を説明しても面白い句にはなりませんし、笠に合っていないも当たり前のことと言っては、「だから何？」となります。例えば、

間に合わん 目覚まし合わせそのうた
は、「間に合わん」の説明です。そこで

間に合わん 目覚まし時計にらみつけ
とした方が面白くなります。

今青春 顔はニキビの花盛り

悪くはない句ですが、

今青春 顎のニキビは誰だろか

と思われニキビを想像させる句にするともっと面白い句になります。もう一捻（ひね）りが肥後狂句を楽しいものにします。どうです、続けてみる気にはありませんか。（鳴神景勝）

今年の応募は2034句。昨年より283句増え、作品も字余り、字足らずの句が減ったことは嬉しい現象でした。

肥後狂句は熊本特有の「笠」付けの短文芸です。出題Ⅱ笠の下に生活の中で使う日常語、話し言葉で見たこと、感じたことを付け句します。句は十二音を厳守後は自由です。

残念なことに、今回も笠を中七や下五に置いた句がありました。「笠」は必ず頭に持つてくること。これと字余り、字足らずの句は選考の対象になりませんので呉々（くれぐれ）も注意してください。

合句（人と全く同じ）や類句（人と場面や切り口が同じ）にならないように、日々の生活の中で見る、聞く、感じることを多方面から作句し、その句が笠に合っているか、基本の約束事をちゃんと守れているか、提出前にもう一度チェックしてみてください。そうすることで気付きがあって、いい句に生まれ変わることもあります。

年ごとに少しずつレベルアップしている若者らしい皆さんの句を楽しむに待っています。（下田民子）